

上海駐在員日記（その4）

茨城県上海事務所 海野 仁男

はじめに

2016年4月から茨城県上海事務所に駐在員として勤務し約2年になります。3年の任期も残り僅かとなってきました。この半年間に上海で実際に自分が見聞きしたことや体験したことを中心に報告したいと思います。

中国のキャッシュレス社会について

前回も記述しましたが、中国のキャッシュレス社会は、銀聯カード（Union Pay）の普及と共に始まりました。銀聯カードは、80強の金融機関が共同で2002年3月に設立した企業で、現在は国内外400近くの組織が加盟しています。それまでバラバラだった金融機関間の決済システムやルールを統一して標準化し、銀聯に加盟した金融機関同士をオンラインで結ぶことで、銀聯設立以前にあった各地域・各金融機関でシステムやルールが統一されていない、異なる金融機関間において残高照会・預入・払戻・送金などの取引が出来ない、同じ金融機関でも異なる地域間における取引については一部または全部の決済が出来ないなどの問題を解決しました。これにより、

- ・国内外どこでも銀聯カードで買物が可能
- ・中国国内ではどの銀行のATMでも預金引出が可能
- ・海外のATMで現地通貨の引出が可能

となりました。

デビットカードとクレジットカードの違いはありますが、筑波銀行のバンクカードと同じような利便性があります。デビットカードのデビット（debit）には、英語で「借方」、「借方に記入する」という意味があり、借方とは簿記の借方貸方の借方のことです。口座からデビットする＝支払するというので、ショッピングの時にリアルタイムで銀行口座から引き落としされます。これに対しクレジットカードは、クレジットカードとも言われます

が、後払いになるため、カード会社は与信が発生することになります。つまり、カード発行には与信審査が必要になります。

しかし、中国の銀聯カードは大半がデビットカードであるため無審査です。銀行口座を開設すれば、その場で発行してもらえます。つまり、口座開設者＝銀聯カードホルダーとなります。更に、1人で複数の金融機関に口座を開設すると、口座数分の銀聯カードを持つことになります（以前は、旅行者でもパスポートを提示すれば口座開設が可能でしたが、現在はビザを取得して居留許可を取得しないと口座開設はできないようです）。そのような事情もあり、全世界で銀聯カードの発行枚数は40億枚を超えられています。

中国では収入の格差が大きく、個人の信用度が低いいため、個人の与信が困難であると言われています。つまり、国民の大多数がクレジットカードを持つことができなかったため、審査不要のデビットカードが普及したと考えられています。現在の中国では、クレジット機能の付いた銀聯カードを持つ富裕層の方々がいますが、やはり、デビットカード所有者に比べればかなり少数であるといえるでしょう。こうして中国でのキャッシュレス社会がスタートしましたが、なんとと言っても近年のスマートフォンの普及が、更に拍車をかけました。

¥ 收银台



微信支付



支付宝付款



银联支付

■ 3大支払方法

「リープフロッグ現象」という言葉を聞いたことはあるでしょうか。リープフロッグ(Leapfrog)は、文字通りに解釈するとLeap(跳躍)するFrog(カエル)になります。また、辞書では「馬跳び」と出てきますが、それがこの言葉の意味に近いイメージです。そして、リープフロッグ現象とは、先進国が遂げてきた発展の過程を一段も二段も飛び越えて進歩することをいいます。特に中国はその代表的な存在です。

電話を例に日本と中国を比較してみると、日本では各家庭に固定電話が普及して、ポケベル時代があり、その後ガラケーやスマートフォンの時代が到来しました。しかし、国土が広大な中国では事情が異なります。送電網の配備などのインフラ整備がなかなか進まず、固定電話の普及率は上がりませんでした。固定電話が家庭に普及する前に一足飛びで、更には、携帯電話も飛び越え、スマートフォンを持つ時代に突入しました。固定電話の様に一戸毎に電話線をひかなくても、アンテナ基地局を一定エリア毎に設置すればインフラ準備が完了になるためです。現在の中国におけるスマホ普及率は70%以上とされています。更に上海など都市部に限ればほぼ100%でしょう。地下鉄やバスで乗客を見ていると、老若男女ほぼ全員がスマートフォンを見えています。

固定電話も無かったところに、携帯電話あるいはスマートフォンが導入され、初めてインターネットに触れた人たちも多いのではないかと思います。これらの普及には、廉価な中国製の端末が大いに貢献している訳ですが、それ以上にスマートフォンがないと便利な生活が送れない状況になっていることがあります。

余談になりますが、先日郵便局に行き郵便を出そうとした時、私の後ろには、現金と公共料金の納付書を握り締めた年配の方が何人か並んでいました。このような人たちも一部に残っていますが、やがてはスマホを持つようになるのではないのでしょうか。

日本では、iPhoneが2008年に発売され、その頃からいわゆる「ガラケーからスマートフォンへの移行」が始まりました。中国ではスマートフォンへの移行と共に急速に普及したのが支付宝(アリペイ)と微信支付(ウィーチャットペイ)です。アリペイは2014年にサービスが開始され、その

後の急成長によりモバイル決済処理額が2013年時点で1,500億ドルに達し、世界最大規模のモバイル決済サービスとなりました。その利用登録者数は2016年時点でおおよそ8億人と、中国国内のシェアの50%を握っています。1日の決済金額は200億元、取引決済数は1億580万件にも上り、圧倒的な取引量を誇っています。日本でも中国からのインバウンド観光客を対象として、コンビニエンスストアや百貨店、ディスカウントストア、家電量販店などでアリペイが利用できるよう導入が広がっているのも、マークを見たこともあるのではないのでしょうか。

一方の微信支付は、テンセントのSNS「WeChat(微信/ウィーチャット)」がベースとなっています。中国版LINEとも言われるWeChatを運営しているのがテンセントです。ウィーチャットペイは利用者を6億人まで伸ばしており、中国国内のシェアも40%まで増加しています。微信の機能の一つとして微信支付が組み込まれており、銀行口座の登録手続きなどをすれば誰でも利用可能となります。

利用方法は、アプリ画面からQRコードを表示させ、決済時にスキャンして読み取るだけで、その後、あらかじめ登録してある銀行口座から自動で引き落としされます。LINEのQRコードを読み取ると決済ができるようなシステムで、中国のリープフロッグ現象をより加速させました。加えて、中国は国民の個人情報を一元管理できる体制があるため、不正や不払いなどの事態が発生した場合でも、すぐに摘発できるようになっています。企業で契約している携帯電話も1台ずつ身分証明書を提示し、実名登録を義務化しています。シェア自転車の加入手続きでは、身分証明書を持った顔写真をアップロードさせて、本人確認やデータ整備を実施しています。ちなみにこの一元管理体制は支払いだけでなく、交通違反や航空券・高速鉄道のチケット購入履歴、個人間で行われるショートメッセージの送受信までも記録されています。外国人は国内の移動であっても、飛行機、高速鉄道、ホテル宿泊、その他一部の施設などではパスポートの提示がないとチケットが買えません。中国人は「中華人民共和国 居民身份证」という顔写真入りの身分証明カードの携帯が義務付けられています。



■ 支払専用QRコード

中国国内の店舗では、この支付宝（アリペイ）と微信支付（ウィーチャットペイ）のどちらかがほぼ使えるようになってきました。つまり、スマートフォンさえあれば、財布も小銭も不要です。更に、中国では食べログ的ソフトとして「大衆点評」がありますが、ほとんどのレストランでは「100元券を88元」というようなクーポンを発行しており、大衆点評の画面から微信のお財布機能でクーポンを決済できるようになっています。つまり、スマートフォンで支払った方が得になる仕掛けが沢山あるのです。このように電子決済が進むことで現金決済の必要性が薄れてきています。

また、先日までは、現金決済のみと言っていた老舗の飲食店でもいつの間にか、微信支付で支払できるようになっているなど、環境はめまぐるしく変化しており、逆に現金決済を拒否する店も出始めているようです。私も、先日家を出て直ぐに財布を忘れたことに気がりましたが、スマートフォンを持っていたので取りに戻ることもなく、特に不自由を感じることもなく、その日1日を生活できました。もはや中国人にとって、財布を持つ必要はなくなったと言ってよいくらいです。



■ 支付宝の支払画面



■ 支付宝支払実績の画面

様々な中華料理

四千年の歴史と称される中国は、広大な面積を誇り、地方が変われば料理の個性もがらりと変わります。日本では北京、上海、広東、四川の四地方の料理が「四大中華料理」として分類されているようですが、それぞれどのような特色を持っているかご存知でしょうか。

北京料理…北京ダックに代表されるゴージャスな宮廷料理

アヒルを丸ごと炉で焼く「北京ダック」のイメージをそのままに、首都・北京で誕生した北京料理はゴージャスな宮廷料理が有名です。また、北京は中国北部の寒い地方であるため、塩味が強い濃厚な味付けが多く、体を温める料理が多いのも特徴です。

代表的なメニューとして「北京ダック」のほか、「餃子」「肉まん」などがありますが、中国で餃子といえば通常は水餃子です。なお、（中国の）東北地方では、餃子はおかずではなく、主食として食されています。

揚げ物や炒め物、麺類なども多く、ラム（羊）肉を使った火鍋、屋台で人気の葱油餅（ツォンヨウピン）なども有名です。

上海料理…小籠包が生まれたグローバルな港町料理

長江に接し、また海にも近い地域のため、海老や蟹などの魚介類が豊富です。その代表格が、まったり濃厚な身の味わいで人気の「上海蟹」です。ちなみに、「上海蟹」と呼ぶのは日本人だけで中国人には通じません。

中国のほぼ全土に生息する淡水蟹のうち長江下流で捕獲されるものが「上海蟹」です。正式名称を「チュウゴクモクズガニ」と言い、中国では、「大闸蟹 ダーチャーシエ」と呼ばれています。養殖ものが1年中出回っていますが、まるごと蒸したものを食べるなら9月下旬～1月頃が美味しいと言われています。なかでも江蘇省昆山市にある「陽澄湖」産の上海蟹が一番美味しいとされ、シーズン中は陽澄湖ブランドの偽物まで出回るほどです。湖の水質がよく餌が豊富なので、陽澄湖の蟹は大きく味よく臭みなく育つと言われています。

江蘇省産なのに「上海蟹」と呼ばれるのこ

に違和感を覚えますが、「東京ディズニーランド」「新東京国際空港」が許されるなら、「上海蟹」でもよいかと思ってしまいました。

また、小籠包や豚の角煮も上海が発祥の地であり、酒、黒酢、醤油などの醸造品を使った甘く濃厚な味わいの料理が多いのが特徴です。そのほか「紅焼魚」「排骨麵」なども代表的なメニューです。

広東料理…世界で一番食べられている中華料理

多種多様な食材と多彩な調理は中国随一です。「食は広州（広東省の中心地）にあり」と言われるほど、中国の長い歴史の中でも独特の食文化を持つのが広東料理です。素材の持ち味を活かしたあっさり淡い薄味が特徴で、日本の横浜中華街をはじめ中国以外の諸外国でも最も多いのは広東料理店であると言われています。

「海鮮料理」がメニューの中心ですが、「フカヒレ」「燕の巣」などの高級食材も使用されます。

代表的なメニューとして「チャーシュー」「酢豚」「フカヒレスープ」などがあり、また、「飲茶」の発祥地としても有名です。

四川料理…「麻」、「辣」、「酸」、「香」の4つの味覚を基本に構成された料理

夏は蒸し暑く、冬は寒さが厳しい盆地で発達した料理です。胡椒や山椒などの痺れるような辛さ「麻（マー）」、唐辛子の辛さ「辣（ラー）」、酸味「酸（スー）」、その他スパイス「香（シュン）」の4つの味覚を基本に構成されています。香辛料が豊富に使われているため、辛味や酸味が非常に強いのが特徴です。

代表的なメニューとしては「麻婆豆腐」が有名です。以前、成都市のレストランで頼んだ麻婆豆腐は、お皿が真っ赤になるほど香辛料で埋め尽くされた見たことのない料理でした。味は勿論激辛で口から火を噴くとは正にこのことでした。上海で食べた麻婆豆腐とは全く別次元の辛さで、四川の人達は毎日こんなものを食べているのかと驚きました。

人気メニューは、担々麵、ホイコーロ（回鍋肉）、チンジャオロース（青椒肉絲）、バンバンジー（棒棒鶏）、海老チリなどで、とにかく辛みを効かせた料理が多いことで知られていま

す。日本で食べる四川料理は、日本人向けにかなりマイルドな味付けになっています。

豚肉、牛肉、鶏、川魚、野菜、穀物類など使用される食材も豊かです。

ヨーロッパでは、フランス料理、イタリア料理、ドイツ料理、スペイン料理など国によって味付けも呼び方も違いますが、中国は国土が広大でヨーロッパ全域がすっぽり入ってなお余りある程の大きさのため、中華料理と一口に言っても、それぞれまったく異なる個性を持っています。日本で食べている中華料理のルーツを調べてみるのも面白いのではないのでしょうか。

中国のマラソン（马拉松）ブーム

余暇の過ごし方は多種多様で、旅行に行くこともあれば、家の中でゴロゴロしたり、外でスポーツをしたりすることもあります。一般的に、余暇としてスポーツを楽しむのは、生活に余裕が出てきてからと言われますが、中国や東南アジアはまさにスポーツ人口が伸び、スポーツビジネスも伸びていく時期にさしかかっていると思います。

中国でも、色々なスポーツが盛んになってきていますが、一番手軽にはじめられるのは、なんといってもランニングではないのでしょうか。ランニングはシューズさえあれば、どこでも、1人でも気軽に始められるスポーツです。

日本では、ランニング人口1,000万人と言われていますが、老若男女誰でも気軽に始められることが健康志向とあいまって支持されているのかもしれませんが、その延長にマラソンがあり、中国もマラソンブームになっているようです。多くの人が健康増進、ストレス解消、そしてハーフマラソンやフルマラソンのためのトレーニングとして、日常的に走っているようです。上海の自宅近くでも早朝や夜、週末など、いつ出かけても、ランニングしている人を見かけないことは無いと言う位、走っている人が多いです。

茨城県でも、かすみがうらマラソン、つくばマラソン、勝田全国マラソンなど、定員が15,000人以上のフルマラソン大会が開催されていますが、その他にも古河はなももマラソンや、一昨年からは始まった水戸黄門漫遊マラソンなど、大会が目白押しです。かすみがうら、つくば、古河などは、

都心から1時間程で行ける近さも人気の理由かもしれません。

上海でも、11月に上海マラソンが行われ、38,000人（うちフルマラソンは28,000人）がエントリーしました。以前は受付順でしたが、混乱を避けるため、現在は抽選方式となっています。2016年は、私もフルマラソンにエントリーし、完走しました。外国人は別枠のため当選確率は高く、私の周りで外れた日本人は1人だけでしたが、今年は抽選に外れてしまいました。そのため大会当日は自宅でテレビ観戦をしました。

今年は、赤いTシャツが参加賞として事前に配られたので、スタート地点となる外灘はその赤いTシャツを着た38,000人の選手たちで埋め尽くされていました。午前7時、スタートの号砲と共に、トップ集団が勢いよく飛び出ていきました。その後、道路がまるで赤い川になったように徐々に動き出す様子は圧巻で、最後の選手がスタートラインを通過するまでに、30分近くかかっていました。一方トップの選手は、9時10分頃にゴールしたので、テレビで見ているとあっという間にゴールにたどり着いてしまった感じでした。



■ 上海マラソンの様子

中国国内では上海だけでなく、北京、広州、アモイ、西安、南京など各地でマラソン大会が開催されています。11月の上海マラソンは国際大会として有名になってきましたが、それ以外にも、ハーフマラソンや10キロマラソンなど小規模な大会は頻繁に行われています。

変り種では、元旦に開催された上海サーキットを周回するハーフマラソンでしょうか。F1のレースが開催されるサーキットのコースを人間が走るのです。しかも元旦に。また、元旦には、上海のテレビ塔（東方明珠塔）を階段で駆け上がるレー

スも開催されました。

元旦から走るというのは我々日本人にはピンと来ない感覚かもしれませんが、中国人にとっての正月はやはり春節（旧正月）のため、元旦は単なる祝日のようです。実際、1月2日から地元企業は通常勤務となっていました。

また、11月には中国で1番の高さ632m（127階）の上海中心（Shanghai Tower）で垂直マラソン（？）大会が開催され、119階にゴールが設けられました。階段数は3,398段にもなりますが、優勝タイムはわずか17分56秒でした。

世界的に有名な多くの大都市（東京、シカゴ、ニューヨーク、ベルリンなど）がマラソン大会を催しており、世界各地から毎年多くのマラソン愛好家を集めています。都市マラソンは中国ではまだ成長段階ですが、都市の知名度を高める最高の武器になると思います。

上海マラソンも年々参加者が増加し、人気のある大会のひとつとなっています。マラソンを目的に2万人～3万人が移動、宿泊、食事、観光をするので、経済効果を大いに期待できるイベントになってきています。

茨城県のかすみがうらマラソンの開催情報がネットの中国語サイトに掲載されていたことがありました。都心から近く、中国人にも興味をもたれているようです。こうしたことをきっかけにして、訪日中国人が増えてくれればと思わずにはいられません。

二人っ子政策

1979年から実施され36年続いてきた「一人っ子政策」が緩和され、2016年からは「二人っ子政策」となりました。「一人っ子政策」の実施の結果、人口4億人余りが抑制され、人口増による資源環境への負荷が緩和されたと考えられています。政策を実施しなかった場合、中国の人口は現在17～18億人に達し、1人当たりの農地・食糧・森林・淡水資源・エネルギーなどはいずれも今より20%以上減少していたと言われています。

一方、「一人っ子政策」の実施がもたらしたアンバランスな人口構造が問題視されています。特に高齢化が急速に進んで、高齢社会に突入してしまうことが大きな懸念になると考えられています。中国の総人口に占める65歳以上の人口の

割合（高齢化率）は、1982年の4.9%から比べると2012年には9.3%にまで上昇しています。また、国連の人口予測では、中国の高齢化率は2025年前後に14%（高齢社会と呼ばれる基準値）に達して、高齢社会を迎えると考えられています。

中国国家统计局の発表によると中国の2016、2017年の出生数はそれぞれ1,786万人、1,723万人で、2017年の出生数は2016年を小幅に下回りました。その内、第2子は、それぞれ、721万人、883万人で、前年より162万人の増加となっています。中国が「二人っ子政策」へ転換したのは2016年からで、それ以前の5年間の平均出生数は1,644万人でした。

「一人っ子政策」実施中も、例えば、親が一人っ子同士である、男女どちらかが少数民族や農村戸籍であるなど、一定の条件下で例外が認められていました。さらに地方によっても異なり、都市部では1人しか認められない状況でも地方では認められたりと、例外規程が多数存在していました。

また、「一人っ子政策」廃止前でも罰金を払えば2人以上の子どもを持つことができました。ただし、罰金額はそれぞれの年収相当の数年分であったため、経済的に余裕のない家庭では、複数の子どもを持つことは難しかったようです。

規制緩和によって第2子の出生数が増加に転じたのは事実ですが、2016年から急に第2子の出産が盛んになった訳でもなく、当所見込んでいた、年間300万人の増加には届いていないようです。

| | 2015年 | 2016年 | 2017年 |
|-------|---------|---------|---------|
| 出生数 | 1,655万人 | 1,786万人 | 1,723万人 |
| うち第2子 | 652万人 | 721万人 | 883万人 |

(出所：中国国家统计局)

これまで「一人っ子政策」を続けてきた中国では、小学生から週5～6日習い事に通うことが当たり前のような状況で、1人にかかる教育費はかなり高額です。知人の話では、「ベンツなどの高級車に乗っている人よりも、2人以上の子供がいる家庭の方がお金持ちだよ」とのことでした。

「一人っ子政策」は終わりましたが、子供の人数に制限が設けられていることに変わりはなく、3人目が認められていないのが、何とも強引な感じがします。

しかし、教育費やその他の出費を考えると、2人目の出産に二の足を踏む人も多く、中国も少子化、高齢化という日本と共通の課題に直面しているようです。

他の先進国を見ても出生率は経済成長率に比例して下がる傾向にあります。今後、急速に高齢化社会を迎えると言われている中国ですが、出産制限を撤廃しても子どもが劇的に増えることは無く、出生率の急速な改善は難しそうな状況です。

最後に

日本政府観光局(JNTO)の発表によると、2017年に日本を訪れた外国人は2,869万人で、前年比19%の増加となりました。その内、中国からの訪日数は735万人で、訪日外国人の4人に1人が中国人です。更に、中国に韓国、台湾、香港まであわせると、4人に3人はこれらの国と地域からの外国人です。

訪日外国人は過去最高を更新し、観光インバウンドには非常に力を入れている訳ですが、一方、日本から中国への訪問者数はわずか215万人(2015年)しかありません。来日中国人の数と訪日日本人の数に大きな差があります。

日本人が抱く中国、中国人のイメージは、日本国内のメディアにより放送されたものや来日中国人における一部のマナーの悪い人達の行動を見たことによるものだと思います。

中国で生活していても、割り込みやごみのポイ捨てをする人も一部にはいますが、全員ではなく、全体としては減少傾向にあると感じています。

我々の隣国である中国との関わりは、日本人にとって切り離せないものです。食品や衣料品など様々なものが中国から輸入されており、今後は支付宝や微信支付などの中国発の支払手段が日本でも普及していくかもしれません。中国発のシェア自転車も既に日本でも始まっています。

また、最近上海では、地下鉄の駅で傘のシェアサービスが開始されたり、あるいは無人のコンビニが開店したりと、スマートフォンを利用した新たなサービスが続々とスタートしています。今後は、中国発で世界中に普及していくものが増えていくような気がします。機会があれば、中国に来て今の中国を体感してみてください。きっと、印象が変わると思います。